

氏 名	みや じ あつ こ 宮 路 淳 子
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 175 号
学位授与の日付	平成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 文 化 ・ 地 域 環 境 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	Transition of economic basis and social organization in the Jomon period with respect to environmental archaeology — Viewpoints from plant food exploitation and storage — (縄文時代の経済基盤および社会構造の変遷に関する環境考古学的考察—植物性食料開発と食料貯蔵の視点から—)
論文調査委員	(主 査) 教 授 光 谷 拓 実 教 授 福 井 勝 義 助教授 松 井 章 教 授 小林達雄(國學院大學大学院)

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は植物性食料の備蓄を示す貯蔵穴の分析を中心に、縄文時代を通じた東西日本の経済基盤の違いと、その上部に位置する社会組織の対比を試みたものである。主たる分析の対象地域として大阪平野を選び、発掘例の多い東日本とを比較した。この地域を選んだ理由は、筆者が1992年から3年間、大阪文化財センター専門調査員として、この地域の発掘調査に従事した知見を生かすことができたためである。この地域は縄文早期末から前期初頭に生じた縄文海進とそれに続く海退によって生じた河内湾、河内潟を縄文遺跡が取り巻くという特徴を持つ。そしてそれらの遺跡の分布とその変遷から、縄文社会の動態を論じ、東日本との縄文文化と比較することによって、その異質性を明らかにすることを試みた。

第1章では、縄文時代における植物性食料の重要性について論じる。一般に高緯度地帯を除く狩猟採集社会では、動物食よりも植物食が主体であったとする見解が定着しているが、縄文文化もその例外ではない。本章ではまず、縄文時代に利用された植物性食料を概観し、植物食をめぐる問題点を明らかにする。これまで縄文時代の植物食の議論は、縄文農耕の存否にのみ単純化されてきた傾向が強い。しかし筆者は縄文時代の植物性食料の利用技術の変遷を論じるために、各遺跡、各時代における生業の変遷を、考古資料と自然科学的手法とを併せた研究により明らかにする必要があると考えた。筆者自身が行った分析も含め、これまでの発掘調査で得られた全国の植物性食料に関する資料を概観し、自然科学を含む複合領域にわたる研究成果を取り入れ、環境と人間との相互の関係史について問題提起を行った。

第2章では、大阪平野における縄文遺跡の分布とその特徴を明らかにし、そこから浮かび上がる遺跡群の変遷から、生業とその背後の社会組織の変遷過程を論じた。本論文で大阪平野を取り上げる意義は、これまで縄文研究の蓄積のある仙台湾、東京湾霞ヶ浦沿岸地域では、主として獣魚骨、貝殻を埋存する貝塚をもとにすることから動物食の考察に偏らざるを得なかったのに対し、広大な内湾や潟湖を持ち、貝塚に加えて低湿地遺跡が発達する大阪平野では、動物性食料と植物性食料とを同じ地域で分析することが可能な点にあると言える。これらの遺跡から得ることのできた生業に関する情報は、この地域における縄文時代を通じた生業活動と集落の変遷の過程を論じることを可能にした。さらにこの地域では縄文時代晩期から弥生時代前期へと連続する遺跡が多く、縄文的な狩猟、採集を基本とする生業活動から、弥生的な水稻稲作農耕の受容という重要な移行のプロセスを考察する手がかりをも得た。

大阪平野では、縄文早期から中期中葉まで水産資源への依存度が低く、陸上資源に関しても、集落内で貯蔵穴を持たないという特徴がある。これはこの地域の縄文社会が、東日本に比べて、小規模で社会も未分化であったことを示唆する。中期後半になってようやくこの地域でも貯蔵穴が出現し、定住化が進展する。この傾向は後期にますます顕著となり、大阪市森ノ宮貝塚に見られる大阪湾への漁労活動の活発化を加え、河内潟の奥部の東大阪市などに小規模な貝塚が形成されるなど定住化が急速に進み、小規模ではあるが各地に拠点的な集落が形成される。晩期には拠点集落が増加し、個々の集落が持つ生

業活動の領域が狭まるとともに、共有や重複も生じただろう。複数の集団が同じ河川やその流域を共有する現象は、晩期中葉以降にこの地域で水田稲作が始まることと関連づけられ、縄紋から弥生へとという社会組織、経済基盤の大きな変容過程の一端を明らかにした。

第3章では、生業活動における食料貯蔵の意義とその変遷から、背後の社会組織との関係を論じる。日本列島の食料資源は、豊かではあるが季節的な変動が大きいという特徴を持って、縄紋文化が早くから発達する南九州や東日本では、縄紋草創期や早期より堅果類を主とする貯蔵穴、すなわち地下式貯蔵が行われた。貯蔵穴に示される食料貯蔵技術は、時代的にも地域的にも多様で、時代を越えてそれぞれの伝統が持続する傾向が窺える。本論文では縄紋時代の全国的な貯蔵穴の分析により、貯蔵活動には個々の家族が管理したであろう屋内（Ia）や屋外（Ib）に設けられた個別管理型貯蔵穴と、住居群に隣接する、共同体が管理したであろう屋外集合型の集団管理型貯蔵穴（II）とを識別し、これら3種類の貯蔵活動の地域的分布は、東海から北陸の東日本とそれ以西とで境界が存在することを明示した。すなわち、東日本では早期以来、集団管理型が主体で、それに個別管理型が付随して発展したのに対し、西日本では縄紋時代を通じて集団管理型が見られず、個別管理型が主体であったことを明らかにした。

結論として西日本では中期前半まで定住度は低く、ごく少数の拠点集落を除いて季節的集合、離散を繰り返すシステムが継続したが、中期後半より貯蔵穴の出現に示される食料貯蔵が一般化するなど、社会組織にも変化がうかがえる。しかし、小規模で相対的に自立した集団は、晩期後半になって積極的に新しい生業、水稻稲作を受容し、それ以降の日本列島の歴史を牽引することとなった。それに対して東日本では安定した食料供給を保証する貯蔵技術の発達が、縄紋集落の定住化を可能にし、人口許容量を引き上げ、そして分布域の拡大やその密度の増加をもたせたことを論じた。また豊富な貯蔵食料が余剰産物を生じ、時代や地域により資源の不平等な分配を呼び、集団内部の社会組織の変容やその階層化を生じた可能性をも示唆した。

以上のように、遺跡の分布と貯蔵穴の有無とを中心に、固有の資源と環境とが貯蔵活動を生み、それに適応した社会システムが築かれるという、相互に影響を及ぼしあうシステムを明らかにした。筆者は東日本の縄紋時代における階層化の出現を、食料貯蔵に示される労働の集約化と階層社会の成立に求め、西日本ではそうした現象がついに出現しなかったことが、次の成熟した弥生文化の水稻稲作経済の受容を可能にしたと結論づけた。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文の骨子は、食料の貯蔵という行為から、それを積極的に活用した東日本と、消極的だった西日本の適応戦略の違いを明らかにし、それぞれの背後の社会組織、そして階層分化への変遷の有無を論じたものである。従来、縄紋社会の研究は、住居跡、墓、埋葬と拔牙、副葬品などから社会組織に迫ろうとする研究が多かったが、貯蔵穴に注目して、それを必要とした集団とそうでなかった集団とを対比し、社会組織まで考察し、ひいては日本列島の縄紋文化の地域的格差を浮かび上がらせようとした研究は高く評価できる。

本論文の注目すべき骨子は、以下のように要約できる。

(1)従来、縄紋時代の生業研究は、貝塚を中心に行われてきたため、動物食に偏りがちであったが、大阪平野をフィールドとして取り上げることで、これまで実証研究がなおざりにされてきた植物性食料の重要性を評価できたことは特筆できよう。大阪平野の遺跡分布と発掘成果から、集落の内容を明らかにし、縄紋時代を通じての動態を追う方法は、この地域では沼沢地と沖積地が発達しており、多くの低湿地遺跡を擁することから、通常の乾燥地遺跡では残らない有機遺物を分析資料として扱うことを可能にした。大阪平野をフィールドとして縄紋時代の動態を研究することのもう一つの利点は、この地が縄紋早期末の縄紋海進のため、南を上町台地で狭められる河内湾を形成し、中期以降の海退とそこに注ぎ込む河川の沖積作用によって、河内湾から河内潟に、そして河内湖へと顕著な自然環境変化が生じ、その変化に対応する縄紋社会の動態を見ることができたことであった。具体的には、各遺跡から出土した動植物遺存体を自ら同定、集計を可能な限り行い、この地域の食料資源のリストとそれぞれの出土量とを明らかにしたことは、本研究の独自の成果で、今後、他の研究者にとっても基礎資料として活用されるべき価値の高いものである。

(2)季節的に偏りのある食料資源を有効に利用するために、食料の豊富な季節の余剰資源を備蓄するための食料貯蔵に注目

し、食料供給を高水準で安定化させる食料貯蔵技術が縄紋時代を通じてどのように進歩したかを論じた。本論文では日本のみならず、ヨーロッパ、北米の研究にも目をくばり、貯蔵穴を考察したことも高く評価できよう。本論文の特色として、ケント・フラネリーの行った中米での微小環境と人間集団の適応戦略に関する研究を参考にしながら、大阪平野という具体的な地域研究と結びつけた点も評価される。

(3)縄紋時代を狩猟採集経済と捉え、その生業活動における植物性食料資源の重要性を明らかにする。申請者が取り上げた貯蔵穴は、多くの縄紋遺跡で発掘が進みながら、具体的な研究が停滞してきた遺構である。本論文ではその出現時期と内容物、時代ごとの増減、集落内での空間的分布から、個別管理型と集団管理型とが存在したことを明らかにして、その背後の社会組織まで論じ、集団管理型主体の東日本に対して、個別（家族）管理型の西日本の縄紋文化の違いを描き出したことは大きな業績として評価することができる。東日本に見られる住居群から離れた貯蔵穴群の出現は、縄紋集落の空間利用に、集団共有の「コモンズ」の存在をほのめかすと考えることもでき、資源の共有化にまで論を進めたことは本論文の成果の一つである。これらの成果は学術雑誌、『古代文化』誌上で査読委員の審査を経て公開されており、『季刊考古学』の「学会動向」欄においても、注目すべき論考として高い評価を得ている。

(4)筆者によると大阪平野の縄紋前期の代表的な集落である藤井寺市国府遺跡を例に挙げても、東日本に比べると完全な定住集落とは言えない状態で、東日本で見えるような大規模な定住拠点集落は、大阪平野ではついに出現せず、相対的に自立した社会集団が、小規模なまま居住する集落パターンが縄紋晩期まで継続したことを明らかにした。こうした小集団が、縄紋晩期の後半に積極的に新しい生業、水稻稲作農耕を受容し、いち早く農耕社会へと変容したのに対して、東日本の縄紋文化が拠点集落を中心とした複雑な精神文化を発達させ、階層化社会の存在すら指摘されながら、農耕社会への変容が遅れた現象とは好対照であろう。このような解釈は、従来の研究には見られず、本論文の独自の見解と言える。

本論文は縄文時代における食料保存技術の解明を、貯蔵穴を中心に議論を進めたが、貯蔵技術は地下式貯蔵だけに限らず、民族学的には北米北西海岸文化で見られる高床の貯蔵小屋やスモークハウスなどといった別種の貯蔵技術も存在するので、今後、考古資料として残りにくい、こうした施設の研究にも目を配り、先史時代の貯蔵技術の総合的研究の発展を期待したい。

以上のように、本学位申請論文は、食料貯蔵技術の一つの考古学的証拠である貯蔵穴を通じて縄紋社会の動態を、東日本のこれまでに蓄積された研究成果と、筆者自身の大阪平野をフィールドとした研究成果とを対比して明らかにしたもので、国内外の考古学、人類学の研究成果をも視野に収めた広い視野に立つもので、文化・地域環境学専攻環境保全発展論講座にふさわしい内容を備えた優れた研究と言える。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成14年12月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。